

## 漢字圏における継承日本語教育に関する研究：年少者の漢字習得の観点から

柳瀬, 千恵美

<https://doi.org/10.15017/1931986>

---

出版情報：Kyushu University, 2017, 博士（学術）, 課程博士  
バージョン：  
権利関係：

氏 名	柳瀬 千恵美			
論 文 名	漢字圏における継承日本語教育に関する研究 — 年少者の漢字習得の観点から —			
論文調査委員	主 査	九州大学	教授	松永 典子
	副 査	九州大学	教授	山村 ひろみ
	副 査	九州大学	教授	三隅 一百
	副 査	九州大学	准教授	志水 俊広
	副 査	九州大学	教授	郭 俊海

### 論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本研究は、海外の非日本語環境で親から日本語を継承する年少者の日本語習得について、漢字圏での日本語継承が非漢字圏とは異なる独自のしくみをもつことを明らかにし、漢字圏日本語継承モデルを提示することを目的とするものである。その枠組みとして、バイリンガルの認知面での言語間転移を説明する Cummins の「二言語相互依存仮説」と、従来の言語環境や言語資源という概念では捉えきれない人や文字、映像、モノとのインタラクションや相互作用を空間により捉える新しい概念である「トランスナショナル空間」を用いている。

本論文は八章で構成される。一章は序論、二章で先行研究及び課題、三章で方法論が述べられる。四章と五章で第一の課題、六章で第二の課題について調査結果を示し分析考察が加えられる。七章では総合考察がなされ、八章で結論と今後の課題が示される。

海外で日本語を継承する年少者については、近年グローバル人材としての期待や注目度も高まり、その日本語習得のしくみ解明も俟たれている。ただし、研究が先行する英語圏では、漢字学習の困難さや民族コミュニティの重要性が指摘されてきたが、漢字圏での漢字習得のしくみ解明は未開拓の分野である。そこで、これらの点を踏まえ、本研究では課題が二つ設定されている。第一の課題は、漢字圏の年少者は、日本語の漢字をどのように認識するのかである。第二の課題は、漢字圏の年少者はどのようなトランスナショナル空間において日本語を習得するのかである。

方法論としては、小学生対象の対話型漢字読み調査及び関連の調査と、中学生以上の子どもを持つ北京在住日中国際結婚家庭日本人母親に対する縦断調査といった質的・量的分析を統合する研究デザインが考案されている。前者の調査は漢字圏を代表する北京・台北・香港と、比較のため福岡を加えて実施され、得られた 160 件のデータのうち 80 件が分析に用いられている。後者は柳瀬 (2015) の母親 27 名の追跡調査である。

考察の結果、第一の課題に対しては、漢字圏の年少者は先行学習した中国語の漢字の意味概念を頼りに日本語の未習漢字を認識することが明らかとなった。そうした漢字の転移を可能にするのが日本語のトランスナショナル空間であり、その空間では日本語の漢字を自律学習していく可能性が示された。第二の課題に対しては、第一の課題の解明により、日本語習得のためには、スキップオーバーディング（適宜な支援）が埋め込まれた家庭・仮想・現実の日本語空間の相互の繋がりと、それらの空間を繋ぐ日本人母親の役割の重要性が明らかとなった。

以上の結果より、漢字圏の年少者が漢字による転移をもとに日本語を自律学習するトランスナシ

ヨナル空間と、日本語母語話者の親による日本語空間の構築と管理が漢字圏日本語継承モデルの鍵となることが提示されている。

本論文では、ほとんど研究蓄積のない漢字圏での日本語継承について、漢字習得の独自のしくみを実証的かつ包括的に解明しようと、詳細なデータを記述しており、その点に新規性が認められる。また、継承日本語教育、言語習得、社会システム論など複数の分野にまたがる成果を示した点が、統合学際的研究分野への貢献をなし得る研究として、審査委員より高く評価された。さらに、漢字圏固有の言語転移の特徴として、表意文字である漢字は形態や文法構造に依存する非漢字圏の言語とは異なる認知面での共有基底がある可能性が示唆されており、この点は Cummins の仮説に新たな視点を投じる内容となっている。これらの点は本研究の今後の発展を大いに期待させるものとして、博士（学術）に値する価値ある業績であると判断された。